2020/7/16　粟飯原美穂

解脱の宝飾

第 9 章　菩提心を摂受する（担当：P.160 11 行目～P.162 18 行目）

境界を通じた区別

〔第二：〕境界を通じた区別は、四つ

1）信解をそなえた発心と、

2）増上意楽（勝れた思惟）をそなえた発心と、

3）成熟した発心と

4）障を断じた発心です。

そのうち、第一は、信解行地により包摂されたものです。

第二は、第一〔歓喜〕地から第七〔遠行〕地までのものです。

第三は、第八〔不動〕地から第十〔法雲〕地までのものです。

第四は、仏陀の地です。

そのようにまた『荘厳経論』(訳注 3)に、「発心それは諸地における信解〔行地〕と清浄な増上意楽〔の菩薩の七地〕と、成熟〔の第八地など〕は他に認める。同じく障を断じたもの〔・仏地〕です。」と説かれています。

摂受(しょうじゅ)：仏道を成就させる方法として、寛大な心で、他を受け入れること。

信解(しんげ)：教えを信ずること。また、信ずることと理解すること。

増上意楽（ぞうじょういらく）：大いなる利他の心

信解行地(しんげぎょうち)：教えを信じ、行じ、その地に至ること(？)

十地(じっち)：菩薩の修行階位

（仏教語大辞典）

1.信解をそなえた発心	信解行地により包摂されたもの
2.増上意楽をそなえた発心	①歓喜地(かんきじ　聖者になった喜びにつつまれる位) ②離垢地(りくじ　汚れの中に入っても汚れを離れた位) ③発光地(ほっこうじ　智慧の光があらわれる位) ④焔慧地(えんねじ　精進波羅蜜を完了して修道の惑を断ち切り、一切の煩悩を焼き尽くした段階) ⑤難勝地(なんしょうじ　煩悩を断じた悟りの智慧をもって自在に救いがたいものを救う位) ⑥現前地(げんぜんち　縁起のすがたが明らかになり、勝れた智慧を引き出す段階) ⑦遠行地(おんぎょうじ　無相の行に住して、世間と二乗の有相をこえた位)

3.成熟した発心	⑧不動地(ふどうじ　無相を観じてあらゆるとらわれを去り、自然に真実のはたらきがなされる境地) ⑨善慧地(ぜんねじ　菩薩が無量の智慧をもって真如を体得し、すぐれたはたらきをおこす境界) ⑩法雲地(ほううんじ　雲が空を覆って雨を降らすように教えを説いて真理の雨を降らせる無量の功徳を具えた位)
4.障を断じた発心	仏陀の地

「ガルチェン・リンポチェ法話集１　修行の道」P.91～P.92

祈願文の中には、菩薩の修道の階位について説くものがたくさんありますので、読んでみられると良いでしょう。たとえば第一地の菩薩の徳はどんなものか、第二地では、第三地ではと、第十地に至るまで説かれています。これらについて知っておくのは良いことです。これらに説かれている菩提心の喩えをいくつかあげてみましょう。たとえば、「菩提心は大地のように安定している」と説かれます。すべては地面から生じますね。土の徳です。私たちは土を色々なことに使います。ですから大地や土は、忍辱波羅蜜の喩えになります。あるいは、「菩提心は自利の心に汚れていない金のようだ」と言われます。あるいは、「毎夜輝きをます上弦の月のようだ。」陰暦の三日頃から十五日まで、月はだんだん大きくなっていきます。あるいは、「火のようだ」というのもあります。すべての煩悩を焼き尽くすからです。このように、さまざまな経典でさまざまな徳について読むことができます。

自相を通じた区別

自相（定義）を通じて区別するなら、二つ

1）勝義の菩提心と、

2）世俗の（V112）菩提心です。

そのようにまた『解深密経』(訳註 4)に「菩提心それもまた二種類－勝義の菩提心と世俗の菩提心です。」と説かれています。

勝義の菩提心

では、勝義の菩提心それはどれほどのものかというなら、空性・悲を胎として明瞭で不動であり戯論の辺を離れたものです。そのようにまた『同経』(訳註 5)に「そのうち、勝義の菩提心それは出世間です。戯論の辺(H52a)を離れている。きわめて明瞭です。勝義を境としたものです。無垢です。不動です。風の無い灯火の相続のようにきわめて明瞭です。」と説かれています。

では、世俗の菩提心それはどれほどのものかというなら、また『同経』(訳註 6)に「そのうち、世俗の菩提心それは悲により、一切有情を輪廻から救い出したいと誓うのです。」と説かれています。

そのうち、勝義の菩提心それは法性により得られたものですが、世俗の菩提心は正しく受けたもの、仮設されたものであると、『荘厳経論』(訳註 7)に説明されています。

勝義の菩提心それはどの境位に有るのかというなら、第一歓喜地以上に有るのです。そのようにまた『荘厳経論の註釈』(訳註 8)に「勝義の発心それもまた第一歓喜地においてなので、」と説かれています。

	勝義の菩提心	世俗の菩提心
同経※	・出世間 ・戯論の辺を離れている ・きわめて明瞭 ・勝義を境としたもの ・無垢 ・不動 ・風の無い灯火の相続のようにきわめて明瞭	・そのうち、世俗の菩提心それは悲により、一切有情を輪廻から救い出したいと誓う
荘厳経論	・法性により得られたもの	・正しく受けたもの ・仮設されたもの
荘厳経論の註釈	・第一歓喜地以上に有る	―

※訳注に「確認できない」とあり

出世間：迷いの世界を超越した悟りの境地に至ること
戯論：無益な言論。愛着心による愛論と、道理にくらい偏見による見論との二つをいう
勝義：極めて勝れていること。最勝であること
（仏教語大辞典）

勝義の菩提心について
「ガルチェン・リンポチェ法話集１　修行の道」P.23～P.24

「虚空と等しき一切有情のために私は、自然成就の原初の智恵、基として生じた顕現と存在の自性に住します。それは三世十方の如来の身語意と功徳と事業の本質です」

これが勝義菩提心です。真の慈無量心が生じるなら、心は虚空のようになります。その時には、利他の願いが途切れることなく生じます。その感覚、その体験は、虚空のようにとても広大で開かれています。その広大な瞬間に自分の心を観察するなら、心のありようそのものを見ることができます。その瞬間あなたが気づくのは明知、まことの観の見解、心のありようです。そして自分のこの心のありようは、造作されたもの（有為）ではないと分かります。これが、すべてが「自然成就」しているという意味です。不二の原初の智恵はもとより成就しているのです。

有情である限り、私たちには妄分別があります。妄分別は、「これは彼」、「これは私」と認識し、外界の対象を区別するものです。ミラレーパは、「菩提心が真に生じれば、妄分別は不二の原初の智恵となる。このとき自他の二元の思考はない」と言われました。ですから、他の人と身体は別々に見えますが、心はまったく同じです。輪郭がありません。分離がありません。投影する感情さえすべて同じです。心の基は光や電気のようです。これを理解すれば、身体のあるものもないものも、一切有情はみなまったく同じ心をもっていることも理解します。それがマハームードラーの見解であり、不二の原初の智恵の「自然成就」です。これが一切衆生の本来の状態なのですが、私たちはまだそれを悟っていません。これを悟ることを、勝義菩提心の生起と言います。

世俗の菩提心

世俗の菩提心については区別するなら、二つ、

1）誓願の菩提心と、

2）発趣の菩提心です。

そのようにまた、『入行論』(訳註 9)に「菩提心それはようやくしたなら、(V113)二種類だと知るべきです。正覚を誓願する心と正覚に発趣することです。」と説かれています。

誓願・発趣の二つのこの差別についてもまた、ご主張は別異が多いのです(訳註 10)。聖者マンジュシュリーから軌範師ナーガールジュナに伝承されてきた軌範師シャーンティデーヴァは、誓願は行きたいと欲するのと似ていて、〔円満なる仏陀・〕正等覚者〔の位〕を得たいと欲する思惟である。発趣は行くことそのものと似ていて、仏陀を成就する行動である、と主張なさります。そのようにまた『入行論』(訳註 11)に「行きたいと欲するのと(H52b)〔現実に〕行くのとの差別を知るように、同じく賢者はこの二つの差別を順次知るべきです。」と説かれています。

「入菩薩行論」P.28

「菩提心は、要約すれば、二種類となることを知るべきである。願う菩提心(＝発願心)と菩薩行に入る菩提心(＝発趣心)とである。」

「〔発趣心をおこした〕その後は、衆生界を救うために不退転の心で、この心を正しく実践することになる。」

・「発願心」:「菩提心を得たい」と願う心

・「発趣心」:「そのために菩薩行に入る」と実際に行動すること

聖者マイトレーヤから軌範師アサンガに伝承されてきた主尊セルリンパは、誓願は、一切有情のために私は正等覚者を得ようといって果について誓いを受ける〔・立てる〕のです。発趣は、仏陀の因として六波羅蜜を学ぼうといって因について誓いを受ける〔・立てる〕ことだと主張なさるのです。(訳註 12)

その義と一致して『アビダルマ集論』(訳註 13)に「発心は二種類－殊勝でないものと殊勝であるものです。そのうち、殊勝でないものは、「ああ私は無上の正等覚に現等覚しよう」というのです。殊勝であるものは、「そのように、施しの完成（布施波羅蜜）を円満にしよう」、というのから、智恵の完成（般若波羅蜜）〔を円満にしよう、というの〕までです。」と説かれています。

そのように譬喩と境界と自相（定義）を通じて発心の区別を説明(V114)しおわりました。

主尊セルリンパ：

「誓願」：一切有情のために仏の悟りを得ようと誓いを立てる

「発趣」：仏陀になるために六波羅蜜を学ぼうと誓いを立てる

アビダルマ集論：

「殊勝でないもの」(特にすぐれていないもの)：このうえなくすぐれた仏の悟りを得よう

「殊勝であるもの」(特にすぐれているもの)：六波羅蜜を完成しよう

1）発願の菩提心について

「ガルチェン・リンポチェ法話集１　修行の道」P.14～P.15、P.17～P.18

「われを恨む怨敵も　妨害する邪鬼も　解脱と全智の障害となる一切の者たちも　虚空と等しき母なる一切有情なれば　楽を得んことを　苦を離れんことを　すみやかに無上正等菩提宝を得んことを」

とても大切なことが説かれています。それは、どのように灌頂を受けるか、とうことです。いつも慈悲を育てるようにと申しておりますが、特に悲心を育てるにはどうすればよいか、ジクテン・スムゴン大師が説いておられます。これはディクン・カギュ派特別の教えです。どう特別かと言いますと、真っ先に、「われを恨む怨敵」などに対して慈悲を育てるところです。他の系譜では、まず母なる有情を自分の親と考えて慈愛を育てますから、そこが違います。育てるのは同じですが順番が違います。これはとても重要です。というのは、どれだけの慈愛を本当に持っているか、自分への試験になるからです。

（中略）

「これは私の過ちだ。彼らのために悲心を育てなければならない。悲心は大きな功徳になる。なぜなら我執を消すのだから。大悲を育てなくてはならない」と考えてください。このように考えて敵への悲心が生じたなら、それは本当の悲心です。その悲心に確信をもつことができます。とても大切なことです。これをよく思惟してください。なぜなら、このようにまず灌頂で授かりますし、このように心は解脱に至るからです。我執から遠ざかるのです。利他心が生じれば我執から解放されます。これが真に自由になるということです。輪廻からの解脱です。

2）発趣の菩提心について

「ガルチェン・リンポチェ法話集１　修行の道」P.20、P.22

「それゆえブッダにならざる間は身語意三門の善業を積まん。死に至らざる間は身語意三門の善業を積まん。今より明日のこのころまでの間は身語意三門の善業を積まん」

（中略）

心で「一切有情を利益しよう」と考えます。言葉について「私はすべて有情のために話そう」「おだやかなやさしい話し方をしよう」と考えることができます。このようにすれば、身体と言葉で為すことすべてが自ずと有情を利益します。そうすれば、世俗の活動も福徳を積むものになり、法の修行になります。それはあなたの心、あなたの志が清浄だからです。たとえ朝から晩まで普段の仕事をしていても、「私はすべてを有情のために為そう」と思うなら、どのような仕事のどんな行いも法の修行になります。それは菩提心の力によるのです。

発心の所縁

正覚に発心する所縁は、正覚と有情の利益を縁ずるのです。

そのようにまた『菩薩地』〔の「発心品」〕(訳註14)に「よって、発心それは正覚を縁ずるものと有情〔の利益〕※を縁ずるものです。」と説かれています。

そのうち、「正覚を縁ずるもの」といわれるのは、大乗の智慧を尋求して縁ずるのです。『荘厳経論』(訳註15)の「発心の章」にもまた、「同じくそれの智慧を求めて(H53a)縁ずるのです。」と説かれています。

「有情〔の利益〕を縁ずるもの」といわれるのもまた、一、二〔の有情〕や幾ほどかの有情〔を縁ずるの〕ではないのです。虚空がおよそ遍満するなら、有情が遍満する。それが遍満するなら、業と煩悩が遍満する。それが遍満するなら、苦が遍満するので、彼らの苦を除去せんがために発心するのです。そのようにまた『普賢行願』(訳註16)に、「虚空の辺際が至るほどに、あらゆる有情の辺際も同じ。業と煩悩が辺際となったほど、私の誓願の辺際もまたそれほどです。」と説かれています。

「ガルチェン・リンポチェ法話集１　修行の道」P.93

たとえば『普賢菩薩行願讃』に、「虚空の果てがいかに遠くとも　有情の果てがいかに多くとも」という偈があります。虚空がどれほどの広さかと考えても、虚空には果てがありません。有情は虚空と同じように果てしなく多く、果てしなく長い間、輪廻に住しています。そしてその間に悪業を重ね、その果として終わりのない苦を味わい続けます。「我が誓願は尽きることなし。」これが仏の誓願です。誓願の故に、仏は決して輪廻の迷乱に落ちることも、涅槃の寂静に留まることもありません。素晴らしい境地だ、解脱できた、と言って終わりではありません。解脱しても、衆生を救うためにまた輪廻に赴かれるのです。ですが、その時には六道輪廻の苦は夢や幻のように見えるので、三悪趣に生まれ変わっても、菩薩にとっては花咲く草原を歩くようなものです。仏に苦はありません。衆生が存在する限り、仏は衆生を利益しに行かれます。これが仏の誓願です。

「ガルチェン・リンポチェ語録」　ガルチェン・リンポチェ（翻訳・野田先生）

菩提心は、ここで修行したらよいとかあちらで修行したらよいとか、そういうものではないのう。菩提心はすべてなのじゃよ。菩提心は修行の基礎だし、修行の実際だし、同時にまた修行の最終的な成果なのじゃ。だから、日夜絶え間なく菩提心を修行しなければならんのじゃよ。夜中に目が覚めたとするじゃろう。そんなときに自分のことをくよくよ考えたりせずに、衆生のことや、衆生が苦しんでおることを考えるのじゃ。誰であれ、心性、つまり実相じゃな、をまだ悟っておらん者は、みな苦しみを感じるしかないのじゃ。財産があるとか、容貌がきれいだとか、権力があるとか、頭がいいとか、そういうこととはかかわりなく、ものごとの実相を悟っていない者は、ただもう苦しみを受けるしかないのじゃよ。だからあなた方は、他人の苦痛を決して忘れないようにして、勇気をふるい起して、その人たちをけっして置き去りにしないと決心し、他人が苦痛から離れられるように自分にできるさまざまのことをしようと決心するのじゃ。菩提心を通じて、「我」などは存在しないということを悟るし、我執は打ち壊されるのじゃ。どうしてかというとな、他人のことを考えるとき、自分のことは考えなくなるからじゃよ。

結局のところ、「自己」と「他人」は頭の産物でしかないのじゃ。自他の間に区別などないというこ

とがわかると、体で菩提心や大悲心の有り難さがわかるようになるのじゃね。

【参考文献】

・「仏教語大辞典」小学館
・「ガルチェン・リンポチェ法話集１　修行の道」　日本ガルチェン協会
・「精読　シャーンティデーヴァ入菩薩行論　ゲシェー・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ 西村香　訳註」
　チベット仏教普及協会
・「ガルチェン・リンポチェ語録」ガルチェン・リンポチェ（日本ガルチェン協会 HP「資料」より）
　台湾ガルチェンダルマインスティテュート